

# 特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアの ヴァリエーション

青木 繁博

## Variation of Middle English Word Pairs in a Specific Literary Genre

Shigehiro Aoki

### 0. はじめに

筆者は現在「一つの言語現象としてのワードペア：無意識的に用いられる英語並列表現の認知意味論」という研究課題に取り組んでいるが、この研究における重要な論点の一つは、ワードペア（英語並列表現）とは、しばし言われるように一様なものではなく、中心的な事例から周辺の事例にまで至る多様さを持つ表現だということである。確かに、ワードペアの中には慣用表現・定型表現・語順が固定された表現なども多く見られるが、それらの枠には収まらない様々な事例の存在が、ワードペアという言語現象の複雑さを示すと考えている。本論文では、これまでに実施した研究発表<sup>1</sup>の際に得たフィードバックなども踏まえ、いくつかの特定のテキストにおけるワードペアの異形態と、ジャンル・テキスト・作者といった文学研究において中心的なテーマとも言える諸局面との関わりについて考察するものである。ここで扱うペアの例は中英語の特定のジャンルに即したものであるが、このように実際の事例を分析した結果から得た知見が、いずれは中英語ワードペア全体の分析へと向かうよう、ひいては現代英語をも含む包括的なワードペア研究につながるよう、展望を持って考察を進めたいと思う。

### 1. 本論文における研究ポイントとその背景

#### 1.1. ワードペアのヴァリエーションという観点について

先行研究においては、ワードペア（以下 WP）にヴァリエーションが見られること自体が軽視されてきた感はある。例えば、本論文でも扱う *The Book of Margery Kempe* については、全体を通じて WP が多く使われているだけに、多くの先行研究において WP が文体上の中心的なテーマの一つとして言及されている。Koskenniemi (1975)、Shibata、Stone、Wilson、Yamaguchi などがそれにあたる。しかしながら、

1 「ワードペアにおける慣用性、定型性、冗長性、反復性について」（日本中世英語英文学会 第29回全国大会、2013年12月1日、於 愛知学院大学）および「プロトタイプ理論と *The Shewings of Julian of Norwich* におけるワードペア」（同第30回全国大会、2014年12月7日、於 同志社大学）。

そうした先行研究においては、ペアになっている語句のみが強調され、場合によっては抜き出され、同じ語からなるペアであれば、異なるヴァリエーションを持つものでもまとめて例示されることも多かった。ユニークなペアを強調したり、WPは頻度が高いがゆえに重要であるといった点を主張するには有効であったと思われるが、諸研究者の意図に関わらず、WPすべてがまるで一様なもの、「定型句」的なものとして受け取られるような誤解が生じる問題もあったのではないだろうか。

### 1.2. ヴァリエーションの一つとしての「語順」

現代英語における WP に類する表現の先行研究としては、Malkiel 以降、Cooper & Ross などの「語順が固定された表現」を扱ったものがある。語順の固定性あるいは「非固定性」に関する最近の成果としては Mollin (2012, 2014) が挙げられる。Mollin (2014) では、BNC コーパスから多数の用例を採り、“(Ir)reversibility score” に沿って 100.00 から 50.00 まで順に（要するに、完全に語順が固定されたものから、全く固定されていない五分五分のものまで）binomials をリストにするなど、実に詳細な分析が加えられている。Mollin 自身 (2014: 7) も言及しているように、Malkiel は必ずしも語順が固定された例のみを扱ったのではない。それにも関わらず、以降の様々な研究は語順が固定された表現を専ら扱うような方向へと傾いていった感はあり、Malkiel 以降の研究動向の「偏り」を是正するという意味でも、Mollin (2012, 2014) の研究には大きな意義があると考えられる。

しかしながら、用法基盤の観点からは、語順「以外」の面にも焦点が当たるべきではないだろうか。実際、以下の考察で示されるように、多くのペアの使用例には、語順の異同以外にも「and 以外の接続詞 (or など) が用いられる場合」「間に別の語が入る場合」「2 語 (ペア) ではなく別の語も含めた 3 語以上で用いられる場合」といった形態上のヴァリエーションが見られる。例えば、現状ではこうした面における異同と、語順の固定-非固定との相関（関係があるかどうか）については不明であるが、そもそもヴァリエーションの観点からの研究がない以上、解明の糸口すら見出せないとも言える。

### 1.3. ヴァリエーションの考察とその展望

上に述べた観点から、先行研究にはなかった一つの視点として、WP の多様な用例への目配りが必要ではないかと考えられる。WP のヴァリエーションを実際の使用例に基づいて整理すること、その結果に対して分析・考察を加えることが研究課題としては残されており、それらを通じて、これまでに言及されていない WP の様態も見えてくるという展望が得られるのではないだろうか。

## 2. 本論文における考察の方向性

### 2.1. 時代やジャンル等とワードペアのヴァリエーションとの関係

Koskenniemi (1975: 215-16) は、*The Book of Margery Kempe* に見られる WP を、語源、時代、そしてどのような文脈で用いられたかなどによって 3 通りに分類している。まず第 1 のタイプは本来語同士の組み合わせからなるペアで、古英語時代からの起源を持つとともに、それらの多くは語順が固定されたものとされている (*heyl & hoyl, hol & sound, wel & wo, to & fro, can & may, witte & wisdom*)。次に第 2 のタイプは“set phrases of the period”と呼ばれ、特定のジャンルに限定されるのではなく、その時代に広く用いら

れたものとされている (*helth & welth, ese & comfort, cher & containys, joy & blisse, joy & gladness, mihti & strong, sygnys & tokenys*)。これらのペアにはロマンス語起源を持つ語が含まれているが、いずれにせよ中英語期には口語表現として定着していたと言われている。そして第3のタイプは、第2のタイプとは対照的に、特定の文学ジャンルに特徴的なペアであるとされている (“more 'literary' type of word pair”)。ここではすなわち、中英語神秘主義文学に特有のものという位置付けのペアである (*payn & passyon, mede & meryte, feyth & beleue, grace & mercy, pite & compassyon, humbely & mekely*)。これらのペアはキリスト教の教義に即した諸概念が結び付けられたものであり、Margery 等の作品における主題を鑑みるに、当該テキストにおける重要表現の一つと言ってよいであろう。

この分類については区分にやや曖昧なところもあるが、過去の研究 (Koskenniemi (1968)) で包括的な WP 分析を行った Koskenniemi が、広範なテキストの読みに基づいて言及したものとして、十分に考慮すべきものではあろう。しかしながら、WP のヴァリエーションという観点だけでなく、より広い意味でも、Koskenniemi が経験的に記述した内容を客観的に検証するということに考察の余地が残されていると考えられる。具体的に言えば、これらのタイプのうち、語順が固定されておらずヴァリエーションが多く見られるであろう第2の「時代」タイプと第3の「文学」タイプについては、その「振る舞い」は同じなのだろうか。それとも、タイプによって異なるヴァリエーションが見られることになるのだろうか。特に「文学」タイプの場合は、ジャンル、文脈、あるいは当該ペアが示す概念の重要性など、タイプに即した何らかの要因が働くことによって WP の使用に変化が生じ、そのことが形態上の相違として現れる可能性はないだろうか。以下の考察では、このような疑問に対して、上に例示した WP (タイプ2とタイプ3とを合わせて13種類のペア) の諸テキストにおける実際の用例を検証することによる解明を試みたい。

## 2.2. 本論文において解明を目指す疑問点

上に述べた観点に基づき、論点を整理すると、以下が本論文において考察すべき問題となる。

- ・ Koskenniemi の言う「時代」タイプ (タイプ2) と「文学」タイプ (タイプ3) の2つのタイプにおけるヴァリエーションの共通点と相違点は何か。
- ・ 相違点については、具体的にどの面において違いが見られるのか (「逆の語順が見られる」「and 以外の接続詞が用いられる」「間に別の語が入る」「3項目以上である」のいずれか)。またテキスト間で違いは見られるのか。
- ・ ヴァリエーションの相違点の原因・理由として考えられるものは何か。

## 2.3. 使用テキスト、調査に関する補足等

テキストは全て TEAMS Middle English Texts [<http://d.lib.rochester.edu/teams>] を使用する<sup>2</sup>。

The Book of Margery Kempe (以下 Margery)

2 オンラインの資料に関しては、概ね2014年11月9日から2015年2月13日までの間にアクセスした結果に基づいている。データを扱う際、単語の検索・集計等にはKWIC Concordance for Windows Ver. 5.1.0を利用した ([http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng\\_dpt/tukamoto/kwic.html](http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/tukamoto/kwic.html))。

The Shewings of Julian of Norwich (以下 Julian)

The Cloud of Unknowing (以下 Cloud)

The Scale of Perfection (以下 Scale)

Book I, Book II と分かれているもの (Margery, Scale) については、I・II 合わせて1テキストとして用例数を集計した。なお、中英語テキストの性質上、テキスト間だけでなく1テキストの中にも多くの異綴が見られる点は考慮して調査したが、以下の提示においては、代表的な綴り字のみを選んで書き記している場合がある。

### 3. 調査・分析

以下、4つのテキストで調査した結果を提示する。表では、ペアの用例数、各ヴァリエーションの数、ヴァリエーションを持たない「型通り」([A and B]の形)の用例の数それぞれについて、テキストごとに集計した。なお、例えば「逆の語順かつ間に別の語が入る」といった重複したケースもあるため、ヴァリエーションと型通りとの合算が、全体の用例数とは一致しない場合がある。

併せて、ヴァリエーションの見られたペアについては、その点がわかる代表的な用例を1例から2例選んで記載した。引用は原則として Margery からとしたが、該当するものがない場合は他のテキストから適宜選択した。引用ではペアの語句はイタリックにて表記している。

#### 3. 1. 「時代」タイプ (タイプ2) の調査結果

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	1			1		
Julian						
Cloud						
Scale						
合計	1			1		

表1：①helth & welth

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	1					1
Julian	2	1	1	1		1
Cloud						
Scale						
合計	3	1	1	1		2

表2：②ese & comfort

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	12			7	1	4
Julian						
Cloud						
Scale						
合計	12			7	1	4

表3：③cher & contenawns

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	11		1	4	2	6
Julian	30	1		11	5	19
Cloud						
Scale	8	2	2	7	1	
合計	49	3	3	22	8	25

表4：④joy & blisse

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	2					2
Julian						
Cloud						
Scale						
合計	2					2

表5：⑤joy & gladness

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	3			1		2
Julian	1	1				
Cloud						
Scale	1					1
合計	5	1		1		3

表6：⑥mihti & strong

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	2		1			1
Julian	1		1			
Cloud						
Scale						
合計	3		2			1

表7：⑦sygnys & tokenys

《タイプ2のヴァリエーションの例》

① helth & welth

Margery Book II 749 I thank the for al *helth* and al *welth* (間に別の語)

② ese & comfort

Julian 567-568 There was no *comfort* nor none *ease* to me  
(逆の語順、and 以外の接続詞、間に別の語)

③ cher & contenawns

Margery Book I 1824 *sche chongyd hir cher* and *hir cuntenawns wondyrly* (間に別の語)

Margery Book I 2684-2685 *thei cowde knowyn in cher, cuntenawns, in worde, and in werke* (3項目以上)

## ④ joy &amp; blisse

Margery Book I 4090-4091 thynkyng what *joy*, what *blisse*, what *worschep* and *reverens* he had in hevyn  
(間に別の語、3項目以上)

Margery Book I 4141 sche knew wel that sche schulde nevyr han *joy* ne *blis* (and 以外の接続詞)

## ⑤ joy &amp; gladness

・このペアについてはヴァリエーションは見られなかった。

## ⑥ mihti &amp; strong

Margery Book I 5241 he mad hir alwey mor *myty* and mor *strong* (間に別の語)

Julian 739-740 He was most *strong* and *myghty* to suffir (逆の語順)

## ⑦ sygnys &amp; tokenys

Margery Book I 2180 be *sygnys* er *tokenys* and in fewe comown wordys (and 以外の接続詞)

## 3. 2. 「文学」タイプ (タイプ3) の調査結果

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	6			2		4
Julian	4			1		3
Cloud						
Scale	1	1		1		
合計	11	1		4		7

表8：⑧payn &amp; passyon

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	3	1		2		1
Julian						
Cloud						
Scale						
合計	3	1		2		1

表9：⑨mede &amp; meryte

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	4		1	4		
Julian	3			1		2
Cloud						
Scale						
合計	7		1	5		2

表10：⑩feyth &amp; beleue

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	12	4		1	2	6
Julian	38	1	1	2	2	33
Cloud						
Scale	1				1	
合計	51	5	1	3	5	39

表11：⑪grace & mercy

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	11				2	9
Julian	2				1	1
Cloud	1					
Scale	3	1		1		1
合計	17	1		1	3	11

表12：⑫pite & compassyon

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	1					
Julian						
Cloud						
Scale						
合計	1					

表13：⑬humbely & mekely

《タイプ3のヴァリエーションの例》

⑧ payn & passyon

Margery Book I 716 for my *peyn* and for my *passyon* (間に別の語)

Scale Book I 987 His *passioun* and His *peynes* that He suffride (逆の語順、間に別の語)

⑨ mede & meryte

Margery Book I 1680 for no nede but for *meryte* and for *mede* (逆の語順、間に別の語)

Margery Book I 1681-1682 incresyng of thi *mede* and of thi *meryte* (間に別の語)

⑩ feyth & beleue

Margery Book I 969 in the rygth *feyth* and the rygth *beleue* (間に別の語)

Margery Book II 678 ne no fals *feith*, ne fals *beleue* for to han (and 以外の接続詞、間に別の語)

⑪ grace & mercy<sup>3</sup>

Margery Book I 484 prayng owyr Lord Crist Jhesu for *grace* and for *mercy* (間に別の語)

3 Julianでは、Margery等とは異なり、逆の語順であるmercy and graceが圧倒的に多かった(37例：対するgrace and mercyは1例のみ)。この点は、Julian自身がこちらの語順で当該ペアを「記憶していた」ことを示すのではないだろうか。いずれにせよ、ここでは「そのテキストで主流となる語順からのヴァリエーションが見られる」という観点から、Julianに限ってはmercy and graceを基準にして集計を行った。

Margery Book I 1099 in the is al *mercy* and *grace* and *goodnes* (逆の語順、3項目以上)

⑫ *pite* & *compassyon*

Margery Book I 1099-1100 Have *mercy*, *pyté*, and *compassyon* of hem (3項目以上)

Scale Book I 908 so greet *compassioun* and *pité* of thi Lord Jhesu (逆の語順)

⑬ *humbely* & *mekely*

・このペアについてはヴァリエーションは見られなかった。

### 3.3. 両タイプそれぞれの合計と結果の分析

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	32		2	13	3	16
Julian	34	3	2	12	5	20
Cloud						
Scale	9	2	2	7	1	1
合計	75	5	6	32	9	37

表14：タイプ2 合計

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	37	5	1	9	4	20
Julian	47	1	1	4	3	39
Cloud	1					
Scale	5	2		2	1	1
合計	90	8	2	15	8	60

表15：タイプ3 合計

- 1) まず用例数について。タイプ3はペアの種類としては1種類少なかったのだが、用例数としては、Margeryのみでも4テキストの合計でも、タイプ2の数を上回っていた。
- 2) ヴァリエーションの全体を通じては、「間に別の語が入る」が最も多いヴァリエーションであり、次いで「3項目以上」「逆の語順」「and以外の接続詞」となるが、後二者についてはタイプ2とタイプ3とで順位が逆になる。
- 3) タイプ2では、他の面と比較し、またタイプ3と比較しても、「間に別の語が入る」の面でヴァリエーションが特に多く見られた。
- 4) 最も多くヴァリエーションが見られた「間に別の語が入る」においても、タイプ3はタイプ2の約半分となっている。ヴァリエーション全体としても、タイプ3では型通りの表現も多い分、相対的にヴァリエーションは少ないと言える。
- 5) Margeryについては、タイプ3では、タイプ2には見られなかった「逆の語順」が見られた。
- 6) Julianについては、タイプ3のヴァリエーションがタイプ2と比べ全体的に少なかった。タイプ3に限っては、多くのペアが[A and B]の型通りに用いられるという傾向が見られた。
- 7) Cloudについては、両タイプを通じて共通のペアが極めて少なかった。
- 8) Scaleについては用例数が少なかったためはっきりとしたことは言えないが、傾向としては、両タイプともに満遍なくヴァリエーションが見られた。



#### 4. 考察

##### 4.1. 相違点の原因・理由として考えられるもの

総合的に見て、タイプ2においてタイプ3よりも多くのヴァリエーションが見られた点については、前述の Koskenniemi (1975) がタイプ2を“set phrases of the period”と呼んだ際の“set phrases”の意味を問うことにつながると思われる。これらのペアが複数のテキストで広く用いられていることは今回の調査でも裏付けられたが、その現われ方としては、多くの場合「型通り」ではなく、「活用される」例も多かった。WPが頻繁に用いられることと、それらが「定型」と呼べるかどうかは、必ずしもイコールではないと言えるであろう。

Margery に関して、タイプ3では、タイプ2には見られなかった「逆の語順」の用例が見られた点については、これら2つの語を対比させたり、それらが示す概念を明確にするという意図を持って使用されたのではないかと考えられ、そのために、語順の固定といった言語表現上の理由とは別の動機に基づいて配置されたものと推測される。

Julian で、タイプ3でのヴァリエーションが少なかった点については、タイプ3のペア（あるいは語句、概念等）は、あくまで Margery にとって重要なものであったという可能性もあるのではないかと考えられる。Julian にとっては最重要のキーワードというほどではなかったために、基本的に「型通り」で使うことにつながったのかもしれない。また Cloud で、そもそも共通のペアがほとんど見られなかった点については、ジャンルとしても時代としても共通するはずの Margery 等と Cloud との間に見られた大きな隔たりであり、これらを含む中英語神秘主義文学の諸テキストにおけるワードペアの「共通性」を、根本的に問い直さなければならぬのかもしれない。ただし、今回は「Margery に見られたペアを諸テキストにおいて検証する」という観点であったため、異なる方向からのアプローチ、例えば「Cloud に見られたペアを諸テキストにおいて検証する」といった考察によっては、また違った面も見られるであろう。

##### 4.2. 「Margery のみで見られるペア」に関するさらなる考察

ここまでの調査を通じて、タイプ2とタイプ3の両方に、Margery のみで見られるペアと、他のテキストにも共通して見られるペアとがあることがわかった。具体的には、① health & welth、③ cher & contenawns、⑤ joy & gladness、⑨ mede & meryte、⑬ humbely & mekely の5種類のペアが、Margery のみで見られるものである。そこで、「Margery のみで見られるペア」が、それ以外のペアと比べて、ヴァリエーションの面で違いがあるかを示したのが下の表である。

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	19	1		10	1	7

表16：「Magryのみ」5ペア

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Margery	50	4	3	12	6	29

表17：上記5ペアを除くもの

	用例数	逆の語順	and以外	間に別の語	3項目以上	型通り
Julian	81	3	3	16	8	59
Cloud	1					
Scale	14	4	2	9	2	2

表18：上記5ペアを除くもの、Margery以外のテキストにおいて

以上の結果からは、Margery のみに見られる5ペアに限っては、「間に別の語」が多い点はこれまでの傾向と一致するのだが、半面「逆の語順」「and以外の接続詞」「3項目以上」らのヴァリエーションが、ほとんど見られないことがわかった。このような「特定のペアにおけるヴァリエーションの種類の少なさ」は、どのように解釈されるだろうか。ことによっては、「Margery は他のテキストには見られないようなペアを、間に別の語を入れる程度で、ほとんど活用せずに用いている」と取ることもできるであろう。これは、Wilson らが言うような、Margery の文体にはやや冗長なところがあるといった文学的な評価に直結していると考えられる。

しかし、これら5ペア「以外」の用例については、表17と表18が示すように、Julian、Scaleといった他のテキストと同じようなヴァリエーションの種類を持ち、その傾向もほとんど同じである（「間に別の語」が最も多いが、「逆の語順」以下の形態も、ある程度見られる）。この点については、これまであまり明確に捉えることができなかった Margery における WP 使用の特徴と言えるのではないだろうか。ここには、文学的に低い評価につながりかねない、特定のペアを決まった形で繰り返しているといった Margery の姿は見えてこない。少なくとも、Margery だけがそうしているとは言えない。

以上のように、テキスト間はもちろん、複数の視点に基づく WP の諸局面におけるヴァリエーション分析においても、ペアのヴァリエーションに差がある箇所と、共通する箇所とが具体的にわかってきたと結論付けられる。一様なものと思われがちな WP の、これまでは漠然としていた部分について、明確に区別して提示することに近づいたのではないだろうか。

## 5. むすび

特定のジャンルまたはテキストにおける WP について、もし「ヴァリエーションは少ない」あるいは「ヴァリエーションの種類が異なる」といったことが明確に言えるのであれば、WP の使い方という一面ではあるが、当該のジャンルやテキストには言語使用上の特色が存在するということである。WP 使用の傾向を詳細に分析するという今回の研究で示した方向性は、今後、様々なテキストにおける WP の様態をより具体的に明らかにし、さらには WP を含む文体の特徴を、これまでとは異なる視点から考察することにつながると考えられる。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 25370451 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Cooper, William E., and John Robert Ross. "World order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 1975. 63-111.
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- 一. "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text : Studies* 新潟青陵大学短期大学部研究報告 第45号 (2015)

- Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212–218.
- Malkiel, Yakov. “Studies in Irreversible Binomials.” *Lingua* 8 (1959): 113–160.
- Mollin, Sandra. “Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility.” *English Language and Linguistics* 16.01 (2012): 81–103.
- . *The (Ir) reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2014.
- Shibata, Shozo. “Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe*.” *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 1958. 209–220.
- Stone, Robert Karl. *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton, 1970.
- Wilson, R. M. “Three Middle English Mystics.” *Essays and Studies*. New Series 9 (1956): 87–112.
- Yamaguchi, Hideo. “A Study of the *Book of Margery Kempe*.” 『神戸女学院大学論集』第18巻第1号(1971): 1–44.

### Online Resources

- TEAMS Middle English Texts. <http://d.lib.rochester.edu/teams>
- The Book of Margery Kempe. Lynn Staley, ed.  
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/staley-the-book-of-margery-kempe>
- The Cloud of Unknowing. Patrick J. Gallacher, ed.  
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/gallacher-the-cloud-of-unknowing>
- The Scale of Perfection. Thomas H. Bestul, ed.  
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/bestul-hilton-scale-of-perfection>
- The Shewings of Julian of Norwich. Georgia Ronan Crampton, ed.  
<http://d.lib.rochester.edu/teams/publication/crampton-shewings-of-julian-norwich>